

安倍首相「私邸」

ゴッドマザー洋子が操る「権力の館」の密事

東京・渋谷区富ヶ谷。代々木公園にほど近いこの高級住宅街の一角に首相、安倍晋三が住む三階建て高級マンション「富ヶ谷ハイム」がある。二つの棟に分かれているその一つは賃貸マンションとなっており、現在は三世帯の外国人が住む。各階一世帯という贅沢な作りだ。

別棟の一階にあるエレベーターの数字「2」を押す。エレベーターが止まるのは「201」号室の玄関前だ。その部屋に住むのが安倍晋三、昭恵夫妻である。そして、その上の階の「301」号室の主は晋三の母・安倍洋子だ。

その力に陰りが見え始めたとはいえ、最高権力者の玉座に鎮座する安倍晋三。その安倍に圧倒的な影響力を持つといわれる「ゴッド

マザー」洋子。さすれば、このマンションの「301」号室こそが権力の奥の院ともいべき場所と

「晋三の近くについてあげないと」

「富ヶ谷ハイム」の所有者は洋子。晋三はその一部を所有しているに過ぎない。近隣でも目を引く豪華なマンションが建設されたのは一九九九年。自民党幹事長、外務大臣などを歴任し、竹下登、宮澤喜一とともに「ニューリーダー」とも呼ばれた安倍晋三が住んでいた平屋を建て替えたものだった。晋三が九一年に亡くなつてから八年後のことだ。洋子の希望による建て替えだったという。当時、晋三は四十五歳という若手の二回生議員に過ぎなかった。

なろうか。今まで語られることのなかったその奥の院に読者を案内しよう。

三夫婦は二階。三菱商事に勤める長男寛信夫婦が一階に住んだ（数年後に転居）。順序からすると長男夫婦が二階に住むのが普通のように思われるが……。なぜ晋三夫婦が二階なのかと、近しい人間に聞かれた洋子はさも当然のようにこう答えたという。

「政治は待つてはくれないよ。時間も大切なよ。すぐに晋三が来られるように近くにいてあげないと」

晋三の政治指南役は自分であるとの宣言である。果たして息子晋三は、度々、母の教えを請うため

に「301」号室に足繁く通つたのだから。母の部屋にある仏壇に安置されている祖父岸信介、実父安倍晋三の位牌に手を合わせ出かけるのは日課にはなっているが、その祈りにクギを刺すような一言を漏らすこともあるようだ。小池百合子（現都知事）と、都議会のドン、内田茂とがバトルを繰り広げている最中、洋子はこんな言葉晋三に投げかけている。

「内田なんかに乗っかっちゃダメですよ」

晋三の「政治指南役」洋子の住む「301」号室。エレベーターを降り、「301」号室の扉を開けると、玄関があり、その先には優に二十畳はあろうかというリビングが広がっている。十人は座れそうな大きなテーブルが据えられ、このリビングに連なる和室に件の仏壇が置かれている。今も旧安倍派の幹部等の関係者がひっきりなしに訪ねて来ては、この仏壇の前で頭を垂れる。

洋子は無類の麻雀好きで、自らの寝室以外に麻雀専用の部屋もこの三階には用意されている。さらにもう一つ、部屋が設えられていたわけだ。

最高権力者の頭上で暮らす「政治指南役」
(富ヶ谷ハイムと安倍洋子)

る。そこに住むのは今年七十二歳になる岡島慶子という女性である。岡島の存在がメディアに報じられるのは恐らく本誌が初めてのことだろう。後に詳述するが、岸家、安倍家に仕え五十年を超える岡島は、今まで語られることのなかった

た岸、安倍両ファミリーの隠れた一員であり、洋子の代理人とも名代ともいえる重きを置かれている存在なのである。

昭和二十年、山口県小野田市に双子の姉妹の姉として岡島は生まれる。父は地元の警察署に勤める警官だった。彼女に転機が訪れるのは二十歳の時だった。岸信介の後援会幹部の口利きで、岸家に行儀見習いに出される。岸信介の私邸（東京・渋谷区南平台）が岡島の奉公先だった。

以来、岡島は岸の私邸に住み込んでその身の回りの世話を続けた。昭和四十四年、岸は静岡県御殿場に私邸を建設する。岡島も家政婦の中でただ一人、御殿場に移り、住み込みでの世話を続けることとなる。岡島二十五歳の時だった。岸はこの地で十七年間を過ごす。

いつしか政界では「御殿場」という呼称は岸を意味するようになった。東京から遠くはなれた地だったが、自民党最高実力者である岸のもとへは、ひっきりなしに政財界幹部が訪れた。そして、御殿場で暮らす岸へ

の、取り次ぎの窓口であった岡島の存在感も、誰いともなく高まっていた。「岡島に気に入られなければ岸先生にも会えない」。こんな噂が政界に広がっていった。もちろん、岡島のまったく知り知らぬ話ではあったのだが。

晋三と昭恵が結婚（八七年六月）した同じ年の八月に岸は天寿を全うする。最後の数カ月、岸は東京都内の病院での入院生活を強いられた。この時、こんなことが起きた。岸が入院すると岸の妻・良子（岸信介の従妹にあたる）の親族が岸の一切の面倒を見ようと、岡島を病院に近づけようとはしなかった。良子の親族らは岡島を疎ん

岸と安倍を知り抜いた「家政婦」

岸亡き後、一時、岡島は双子の姉妹の妹の所に身を寄せるがそれも長続きしなかつたようだ。岡島の窮状を知った洋子は、彼女を安倍家に招き入れる。

「私の手伝いをしてくれる？」
こうして岡島は渋谷区富ヶ谷の安倍家に住み込みとして入る。そして今、岡島は八十九歳となった洋子の身の回りの世話をする一方

がその親族を叱りつけた。

「岡島は二十歳の時から父の面倒を見てくれた恩人なんです。一生を捧げて父を助けてくれた人なんです。その岡島を病室に入れないとは何ごとですか。父の最期は岡島に看させるのが人情でもんじゃないですか」

洋子の剣幕にその親族らは黙るしかなかった。岡島は岸の病室に泊まり込み、その最後を安倍家の面々とともに看取った。洋子にとつて実父に一生を捧げてくれた岡島は身内でこそあれ、他人ではなかった。

で、時には晋三の食事の世話などもしている。その意味では彼女は、岸信介から安倍晋三、そして晋三と、三代にわたつた両家の盛衰を見続けてきた数少ない生き証人の一人なのである。また岡島は岸の私邸であった南平台、御殿場で数多くの政界の舞台裏を目撃し、岸から茶飲み話として政界の裏話を直に聞かされてきた希有な存在



でもあるのだ。

岸の最晩年。晋三の結婚話を最も喜んだのは岸であったという。

晋三が森永製菓の創業家の娘（昭恵）と結婚することを聞かされた岸は小躍りして喜んだという。

そして、こんなことを漏らしたといわれる。

「岸、佐藤の家は自分と弟（佐藤栄作。元首相）の二人の首相を出してはいる。けれども、元を辿れば水呑百姓の出だ。それが晋三の代になって森永（製菓）という日本

「岸家至上主義者」の洋子

岸家から安倍家へと移った岡島。安倍家では当主の晋太郎が首相を狙うポジションにあり、取材にやってくる記者たちばかりか陳情客等も多く、岡島も忙しく立ち働いた。

そんな安倍家の晋太郎ばかりか、洋子も大のつくほどに好きだったのが麻雀だ。晋太郎は政界関係者らと卓を囲むことが多かった。記者や秘書らに混じって妻の洋子が入ることもあった。

洋子が卓の主役となる場合、メンバーはほぼ固定されている。洋

子さんと呼んだ。

洋子は八月の終戦の日が近づくと、必ず家族にいつもの話をした。

一九四五年、日本が敗戦を迎え、皆が将来の不安におののいていた頃、洋子は山口銀行田布施支店の預金係を務めていた。窓口立つ洋子は、何度となく指をさされては「戦犯の娘」「岸が戦争を起したんだ」などと罵られた。その度に洋子は歯を食いしばり堪えたという。

そうした父岸信介への思いが、洋子をして「岸家至上主義者」にしたとの見方もある。たしかに、ある意味、それは正しい見方なの



岸家の血脈から3人目の総理を輩出できるか
(左から安倍洋子、岸良子、岸信介、岸信和、岸仲子、安倍晋太郎)

を代表するような家の娘を嫁に迎えることができて、こんなに嬉しいことはない。これでやっと岸の家も佐藤の家もしかるべき家になれる」

昭恵は岸との初対面でも気圧されることなく天真爛漫だった。岡島は岸の前でも臆することなく、ニコニコと笑顔を絶やさない昭恵を不思議な思いで眺めていた。岡島もまさか後年、この昭恵とフロアこそ違えど同居するようになるとは思ひもしなかったはずだ。

子が習っていた「鼓」の師匠、安倍派の代議士だった加藤六月の妻陸子、そして私設秘書・清水三三夫の妻の三人だった。周知のとおり、加藤六月の女婿加藤勝信は安倍側近であり、現内閣では厚生労働大臣。六月の長女康子は内閣官房参事を務めている。

昭恵にとって、女性たちが麻雀卓を囲む光景など、ついぞ見たことがなかったはずだ。姑洋子が卓につくとお茶を運んだり、食事の用意をしたりするのは昭恵の役割とされた。どのタイミングでお茶

である。しかし、洋子の岸家への思いの背景には、洋子の七歳上の兄信和への深い憐憫の情があるようだ。

三歳にして小児麻痺を患い、身体の不自由と戦った兄。本来であれば父信介の正統な後継者であったにもかかわらず、身体的な理由からそれを断念させられ、また自身の継承者にも恵まれなかった兄に対し、洋子はひとかたならぬ情を抱き続ける。その一方で、寛信、晋三に次いで生まれた信夫を生後二カ月にも満たない時期に手放したことについては、後々まで「信夫が不憫でならない」と漏らしていた。決して岸家のために諸手を挙げて養子に差し出したわけではないようだ。

もちろん、理の世界では岸家を絶やすわけにはいかないと思いつつも、母親の情は信夫を深く思い続けさせた。それゆえだろう、信夫の政治家としての先行きには誰よりも心を砕いている。

今年六月十九日、元国家公安委員長、吹田愧が亡くなった。一時は自民党を離れたが、岸信介の元秘書であり、晋太郎の側近だった

を出すのか、

それぞれの好みは何か。食事の好き嫌いはあるのか。

そうしたことを事細かに教えるのは岡島だった。これが政治家の家に嫁いだ者に対する教育と

洋子は考えていたようだ。麻雀など知らないまま、昭恵は洋子の横に座らされては、一癖も二癖もある政界関係者が牌を切りながら軽口を聞かされていた。共同通信記者から紆余曲折を経て、安倍事務所の人間となった清水だが、その妻は派手な女性だった。「五本の指では足りないのではないか」と陰口を叩かれるほど、華美な指輪をすることも有名だった。

ある時のことだ。昭恵ちゃん、これあげるわよ」清水の妻が自らの指から指輪を外し、それを昭恵に差し出した。戸惑いながら姑に視線を送ると、

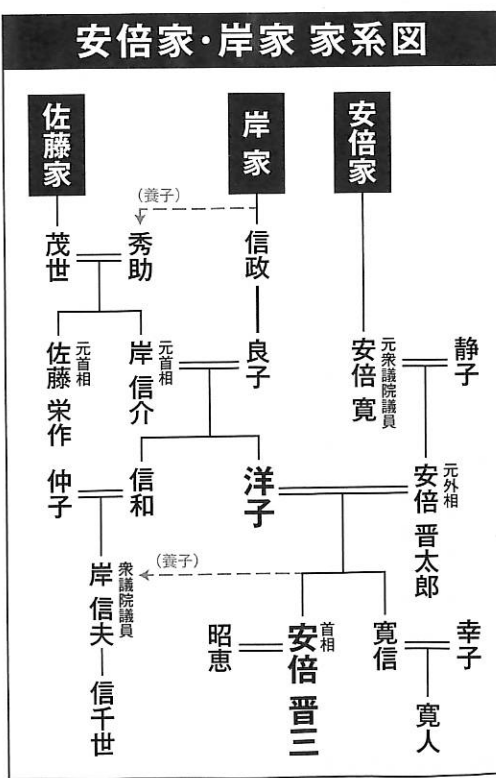
吹田はいわば安倍家の国家老として地元山口県政を牛耳ってきた。信夫が参議院から衆議院議員（山口二区）に鞍替えする時も洋子は信夫とともに吹田に頭を下げた。

「岸四代」の夢託された信千世

岸信介への情念と思慕を隠そうとしない洋子、そして岡島が鎮座する富ヶ谷ハイイツ「301」号室。二人の政治指南役が描く夢は岸信介、安倍晋三と引き継いだ首相の座を、岸信夫、そしてその長男の信千世に引き継ぐことである。

第一次安倍政権時代、山口県へ初めてのお国入りを果たした時、集まった三千人余りの後援者を前にまず紹介されたのは学生服も初々しい岸信千世だった（本誌八月号参照）。

現在フジテレビで宮内庁を担当している信千世は、将来政治家になることをあつげらんと公言するような明るい青年。曾祖父岸信介について書かれた評伝は全て読んでいたという彼は、明らかに自らの託された運命を意識しているようにもみえる。



洋子は事も無げに、「もらつときなさいよ」といったという。昭恵にとつては、どれもこれもあまりに実家と違うことばかりが、安倍家では当たり前のように起きていた。

洋子は昭恵の気持ちを察したように、こんな言葉をかけては政治家の妻の心得を説いたという。「私は古いタイプなのでしょうね。私は母に学び、カン子さんに学んだのよ。だから貴方は私に学んでください。何でも教えるから」

洋子が「カン子さんと呼んだのは叔父であり首相だった佐藤栄作の妻寛子のこと。近しい身内は彼女のことを、敬愛を込め「カン

そして、身内だけの葬儀にもかかわらず、洋子はやはり信夫を連れて通夜の席に参列した。吹田亡き後も、吹田系の地元議員らの協力なくして信夫の当選はあり得ない。

「父（信夫）は商社（住友商事）出身ですから、やはり外交で晋三さんを助けたいと思っっているようです」

外務副大臣だった時代、対ロシア交渉の重要性について信夫は信千世に、折に触れて語っていたという。

「お婆様は私たちの心の支えですから」

洋子が描く夢はやはり岸信介、晋三を継ぐ総理の誕生である。次は安倍から岸へ——。信千世がそれを果たせば、ゴッドマザーが夢見た「岸四代」の栄華が実現する。果たして首相・晋三は、私邸301号室にある仏壇の前で、祖父と父の位牌に向かい、何を思っているのだろうか。（敬称略）